

## 当病棟における現在のカンファレンスの意識調査 —カンファレンスの活性化に向けて—

key word カンファレンス、意識調査、看護師  
11階東病棟 ○屋部奈菜子 水戸綾

### はじめに

#### I 目的

カンファレンスは、「①個人の体験をチームが共有し、チーム全体の技術水準を高める、②個々の患者への看護計画の妥当性の検討、③チームメンバーの意思統一を図り、効率的な看護実践を目指す、④共同学習による新知識の習得、⑤患者の見方を育てる、⑥他職種との連絡調整を目的としている」<sup>1)</sup>と川島は述べている。

カンファレンスの実施が、スタッフ同士の情報共有の場、行った看護の振り返りの場となり、よりよい看護ケア提供につながることは先行研究からも明らかである。

当病棟は8～9割が急性期患者であり、その他終末期患者や老年期で介助を必要とする患者が混在し、7:1の看護体制で看護を提供している。看護師は1～5年目14人、5年目以上13人在籍しており、知識、経験の幅、情報収集能力などに差があり、患者の把握や看護の内容にも影響している。

現在当病棟ではチーム内での申し送りや、昼に15分間の日勤者でのショートカンファレンスを実施している。現在当病棟で行われているカンファレンスは、各チームが注意して見ていかなければいけない患者を挙げ、現在の状態や行っている処置、対応などの近況報告のみである。そこからの看護方針となるような具体的内容を挙げ、患者の個別性や看護計画の見直しなどを話し合う機会は少ない。それに加えて、時間外でのカンファレンスを行うことへの抵抗感や、業務密度が高くカンファレンスを行う時間の確保が困難であるなどの現実もある。

清水は「急性で治療展開が早くても、ケアの継続性や方向性の検討を必要とする患者は存在する。また、スタッフ教育、知識や経験の共有など有効なカンファレンスは看護の質を向上させるものである」<sup>2)</sup>と述べ、更に杉野は「他人の考えを聞き、刺激しあい、他者の価値観を学ぶなどチームで生み出すもののほうが、はるかに質が高く、チームの協力が得られ、結束を高める」<sup>3)</sup>と述べている。

そこで、カンファレンスが十分に生かされていない当病棟において、現在行われているカンファレンスの何が問題であるか抽出し、今後カンファレンスを活性化する為の資料にしたいと考えた。

用語の定義：カンファレンスとは、担当の看護師が司会進行を務め、日勤者5～6名で、患者の情報共有、

看護計画の妥当性の検討、看護ケアの統一、看護の質の向上をはかるための場である。

#### II 研究方法

- 1) 調査対象：11階東病棟看護師 27名
- 2) 調査期間：平成23年1月
- 3) 調査方法：自記式アンケート用紙による調査  
東京医科大学病院11階東病棟看護師を対象としたアンケート調査を実施する旨を東京医科大学病院看護部長に説明し了解を得た。アンケート用紙は個人宛に配布し、回収は病棟に回収袋を設置し自由に入れられるようにした。
- 4) 調査内容
  - ・カンファレンスにかかる時間 1項目
  - ・カンファレンスを行う時間 2項目
  - ・現在行っているカンファレンスに対する意識調査 4項目
  - ・カンファレンスに対する積極性 3項目
- 5) 分析方法：単純集計

#### III 倫理的配慮

研究の目的及び方法等について書面と口頭で説明し、同意を得た看護師を対象とした。また、参加しなくても個人に不利益が生じないこと、個人を特定できないよう、経験年数のみ記入とし、看護研究終了後アンケート用紙は処理することを説明。東京医科大学医学倫理委員会の承認を得た。

#### IV 結果

回収率、有効回答率100%であった。

1. カンファレンスにかかる時間  
「現在行われているカンファレンスの時間が妥当であると思いますか」の質問では、とても思う4%、思う59%、あまり思わない30%、全く思わない0%、無回答7%であった(図1)。思うと回答した理由として「少しでも話し合える場となっているため良い。」思わない理由として「忙しい日では少し長い。」「時間が足りない。」「手術帰室などと重なる、忙しい日にはどうなのか…。」などがあつた。
2. カンファレンスを行う時間  
「勤務時間外にカンファレンスを行うことに抵抗がありますか」では、とてもある26%、多

少ある 48%、あまりない 22%、全くない 0%、無回答 4%であった (図 2)。とてもあると回答した理由として、「できれば勤務内で行いたい。」「カンファレンスも業務の一部であるから。」という意見が多かった。また、「看護を深める、患者のためには必要な事だと思う。」との意見もあった。

「勤務時間内にカンファレンスを行う時間を確保することが出来ますか」では、とても思う 4%、思う 63%、あまり思わない 22%、全く思わない 4%、無回答 7%であった (図 3)。また、「その日の忙しさによる。」「ウォーキングカンファレンスの導入。」などの意見も聞かれた。

### 3. 現在行っているカンファレンスに対する意識

「現在病棟で行われているカンファレンスに満足していますか」では、とても満足 0%、満足 37%、不満 56%、とても不満 7%、無回答 0%であった (図 4)。その理由として「時間が足りない。」「情報の共有は出来るが、安全のカンファレンス・患者の状態報告のみとなっている。」「ケースカンファレンスがいない。」などの意見がみられた。

「現在行われているカンファレンスは一般的に定義されているカンファレンスであると思いますか」では、とても思う 0%、思う 37%、あまり思わない 56%、全く思わない 7%、無回答 0%であった (図 5)。その理由として「情報共有の場。」「看護方針が話し合っていない。」などの意見が聞かれた。

「他看護師の考えを参考にしたいと思いますか」では、とても思う 52%、思う 44%、あまり思わない 0%、全く思わない 0%、無回答 4%であった (図 6)。理由として、「患者のため、自己成長のためにより考えは取り込みたい。」という理由があった。

「現在のカンファレンスは充実した看護提供に結びつくものであると思いますか」では、とても思う 0%、思う 30%、あまり思わない 52%、全く思わない 4%、無回答 14%であった (図 7)。思わないと回答した理由として、「看護の話し合いはできていない。」「統一した看護につながる。」「転倒防止にしかっていない。」「カンファではない。」などの意見が多かった。一方、「情報交換になる。」「色々な症例の患者をどういう風に見るかの参考になる。」などの意見もあった。

### 4. カンファレンスに対する積極性

「カンファレンスで発言することに抵抗はありますか」では、とてもある 4%、少しある 26%、あまりない 44%、全くない 22%、無回答 4%であった (図 8)。理由として、「年数が少ないため、自信がない。」「緊張する。」などが

あった。

「カンファレンスに参加する際、自分の意見・考えをもって参加していますか」では、持っている 26%、少しは持っている 55%、あまり持っていない 19%、全く持っていない 0%、無回答 0%であった (図 9)。持っている理由として、「意見を持たないのは無関心で、チームになっていない。」持っていない理由として「自信がなく発現しづらい。」などがあった。

「カンファレンスでは活発に意見交換をしたいと思いますか」では、とても思う 18%、思う 63%、あまり思わない 15%、全く思わない 0%、無回答 4%であった (図 10)。とても思う、思うと回答した理由として、「患者のためになる。」「色々な意見で視野、看護を深めたい。」などがあるなか、あまり思わないと回答した理由として「自分の意見を否定されたら嫌だから。」という意見もみられた。

## V 考察

現在当病棟で行われている 15 分間のカンファレンスの時間は患者の情報共有や看護計画の妥当性の検討などを話し合うには短時間であると考えたが、結果ではスタッフは妥当な長さであると感じている。勤務時間外でのカンファレンスは否定的な回答が多く、時間外での業務を負担であると感じている。その要因としては病棟集会や安全会議、勉強会といった時間外で行わなければならないことが多いことや、仕事以外のプライベートな時間を仕事と混在させなければいけないという事などが読み取れる。一方、勤務時間内にカンファレンスを行う時間を確保することは、勤務状況にもよるが、確保できるという、前向きな意見が多かった。当病棟で行われているカンファレンスで話し合われる内容に対し、不満を持っているスタッフが半数以上を占めた。その理由として多かったのは情報交換や報告のみであるというものだった。結果からもわかるように、当病棟のカンファレンスは十分な話し合いが出来ていないことがわかる。スタッフは、情報の共有、看護計画の妥当性の検討、看護ケアの統一、看護の質の向上に繋がる内容を網羅したカンファレンスを望んでいることが伺える。

看護師個人や経験年数の差などから、カンファレンスに関する認識に差があることが伺える。当病棟ではチーム内での申し送りや 15 分間のカンファレンスを実施しているが、患者の看護方針や看護計画の見直しなどについてのカンファレンスを行う機会や、カンファレンスについて学ぶ機会は少ない。そのため、スタッフのカンファレンスに関する知識や認識に差がある状況にある。今回の調査では、スタッフのカンファレンスに関する知識について事前に調

査はしておらず、経験年数や個人でどのような認識の違いがあるかは明確ではない。そのため、今後スタッフのカンファレンスに関する認識を深め、統一を図るための場を設けることが必要であると言える。

他看護師の考えを参考にしたいと思っているスタッフは多かった。経験年数の差や、看護観の違いから他看護師の考えはとても貴重なものであり、新たな視点になると考える。カンファレンスで発言することは経験年数が少ないほど、抵抗があるのではないかと考えていたが、緊張や自信が無いとの意見は聞かれたが、発言することに対する抵抗はないと答えたスタッフが多かった。経験年数の多いスタッフからの意見や考えは経験年数の少ない看護師にとっては貴重であり、相談の場ともなり、看護の質の向上へと繋がると考える。現在のカンファレンスは充実した看護提供に結びつけることが難しいとの結果であった。図4の結果でもみられたように、情報交換や報告のみであるというものであった。現在当病棟で行われているカンファレンスに対しスタッフは情報交換や報告の場であると思っていることから、カンファレンスをより充実させ、看護に結び付けられるようなものにしていきたいと考えていることが伺える。カンファレンスへの意欲や向上心はあることがわかる。現在病棟で行われているカンファレンスでは、情報交換や報告のみと答えるスタッフが多かったにもかかわらず、自分の意見や考えを持って参加していることが分かった。カンファレンスの司会者は目的を明確にし、カンファレンスに適したタイミングやメンバーの選択と場所の確保、脱線を防ぎまとめる、話の各段階を意識する、刺激を与える、感情をキャッチして討論を展開していくなどの技術が必要である<sup>1)</sup>と川島氏が述べているように、カンファレンスの進行によって経験年数関係なく、意見や考えを持って参加しているスタッフがカンファレンスに積極的に参加し、発言出来て行くようになる<sup>1)</sup>と考える。

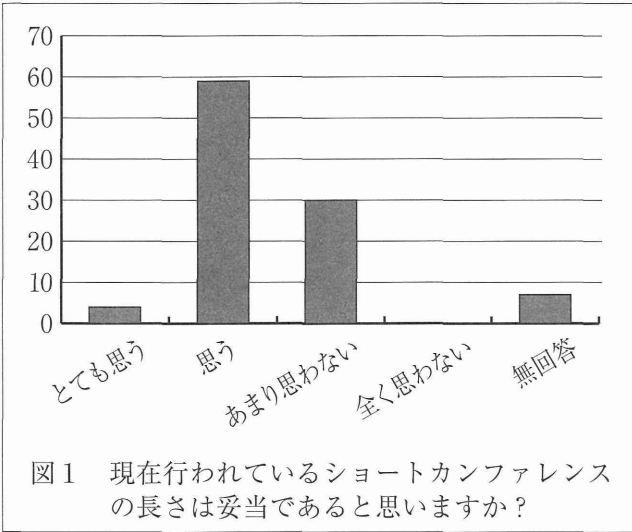
## VI 結論

1. スタッフのカンファレンスに対する認識や知識に違いはあったが、カンファレンスへの意欲や向上心はあることが分かったため、カンファレンスに対する認識を統一化し、定着させていく必要がある。
2. スタッフはカンファレンスに参加する際、自分の意見を持っているということが分かった。しかし、現状のカンファレンスでは情報交換のみになっていると多くのスタッフが感じているため、充実した看護ケアに結びつくようなカンファレンスの方法を今後は考えて行く必要があると考える。

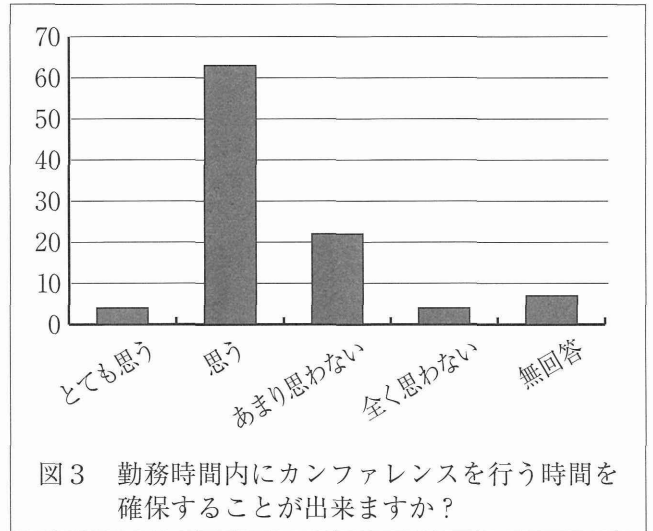
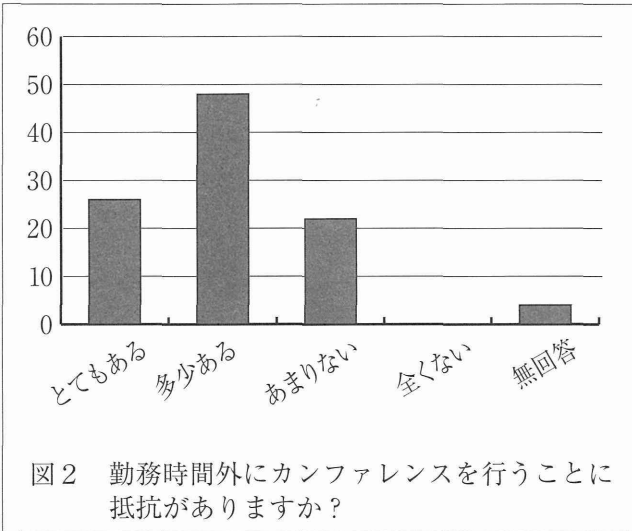
## 引用・参考文献

- 1) 川島みどり. 看護カンファレンス. 東京, 医学書院, p.8-179, 2008.
- 2) 清水称喜. カンファレンスを成功させるためのアイデアと工夫. 看護実践の科学. 433 (2), 6-41, 2008.
- 3) 杉野元子. 看護を語り、調整の場としてのカンファレンスへ: 成果を生むチーム活動の道具として. 看護実践の科学. 33 (2), 6-12, 2008.
- 4) 山田訓代, 青山真由美, 岡崎千都世, チーム医療の充実を目指したカンファレンス. 名古屋市立大学病院看護研究集録. 75-78, 2006.
- 5) 加藤久美子, 林田志穂, 鈴木友香子他. 有効な情報伝達とカンファレンスの活性化に向けて. 名古屋市立大学病院看護研究集録. 32-37, 2004.
- 6) 佐々木芳子. カンファレンスの取り組みからみた教育的効果について. 看護実践の科学. 35 (10), 6-28, 2010.

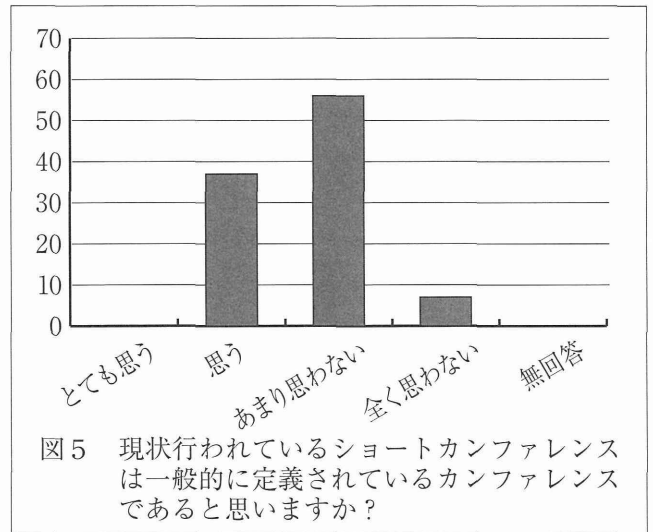
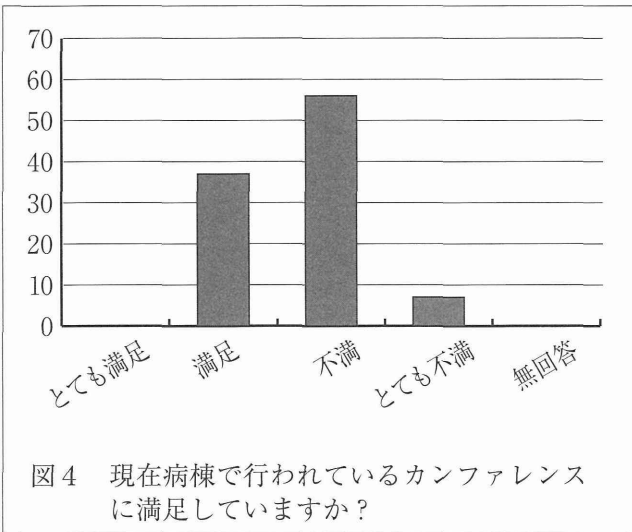
1. カンファレンスにかかる時間



2. カンファレンスの行う時間



3. 現在行っているカンファレンスに対する意識



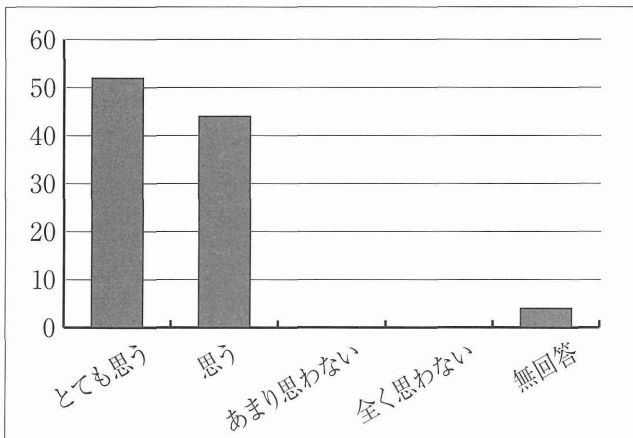


図6 他看護師の考えを参考にしたいと思いませんか？

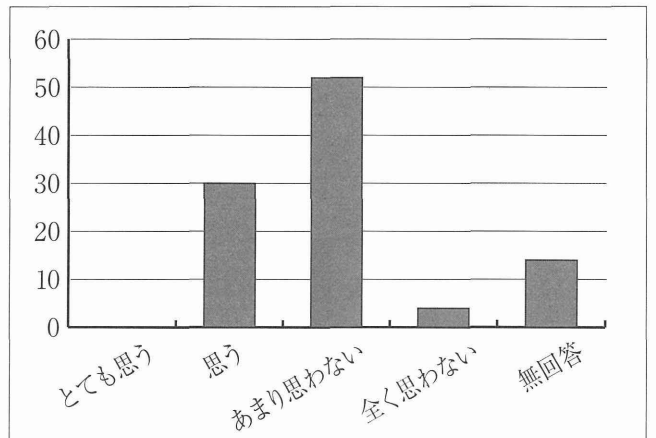


図7 現在のショートカンファレンスは充実した看護提供に結び付くものであると思いますか？

4. カンファレンスに対する積極性

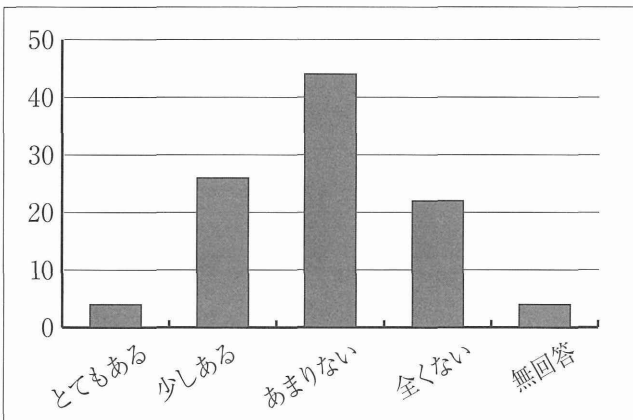


図8 カンファレンスで発言することに抵抗はありますか？

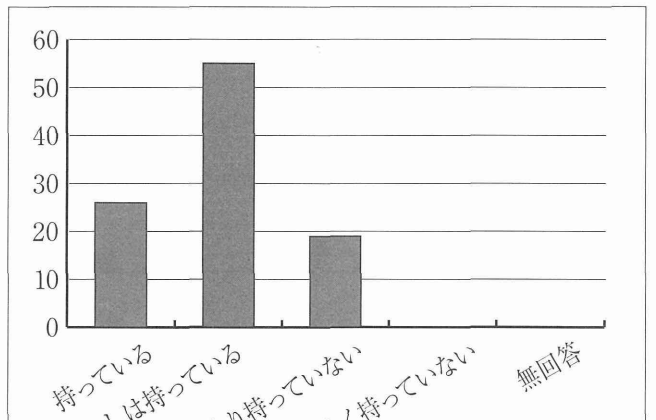


図9 ショートカンファレンスに参加する際、自分の意見・考えをもって参加していますか？

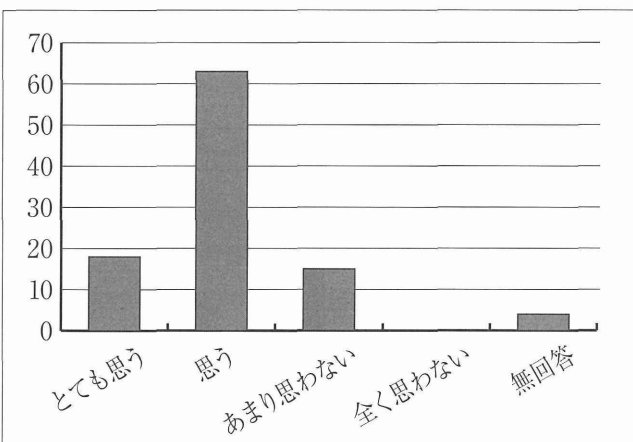


図10 カンファレンスでは活発に意見交換をしたいと思いませんか？